

報告

韓国にみる図書館の新しい動き

詫間 沙由香[†] 兵藤 健志[‡] 牧瀬 ゆかり[§] 南 俊朗^{**} 井上 創造^{††} 金 銀子^{‡‡}
<抄録>

2009年2月下旬、ソウル市内外にある2つの大学図書館（ソウル大学校図書館および成均館大学校図書館）と2つの公共図書館（国立中央図書館・国立デジタル図書館および議政府市図書館）を訪問した。これらの図書館では、ICタグなどの最新技術を導入した設備やインフォメーション・コモンズなどの利用者へのサービス空間としての機能の整備状況を見学することができた。図書館をめぐる日本と韓国の環境には社会の仕組みや背景となる文化の相違などがあるものの、多くの類似点もある。韓国の先端的図書館の新しい動きは、これからの日本の図書館の進むべき方向を示唆しているのではなかろうか。

Reports on Advanced Library Services and Equipments in Korea

TAKUMA Sayuka HYODO Kenshi MAKISE Yukari MINAMI Toshiro INOUE Sozo
KIM Eun-Ja

1. はじめに

2009年2月22日から25日の4日間にわたって、韓国の図書館を訪問した。訪問の主な目的はICタグなどの最新設備やインフォメーション・コモンズの整備状況を視察することである。

訪問した図書館は、ソウル大学校図書館、成均館（ソンギュングァン）大学校図書館、国立中央図書館/国立デジタル図書館および議政府（ウィジョンブ）市図書館である。以下、図書館ごとに注目した点やその印象を中心に報告する。なお、ソウル大学校図書館に関しては兵藤の海外研修報告[3]に詳しく紹介されている。



2. ソウル大学校図書館

ソウル大学校（Seoul National University, SNU）は学生数約2万3千人、教職員数約6千人、16学部を擁する韓国最大の総合大学である。訪問した冠岳（クァナク）キャンパス（メインキャンパス）は山1つを切り開いて作られているため、とにかく広く、起伏がとても激しい。週末には登山客もやってくるとか。今回見学した中央図書館[6]はそのキャンパスの中央に位置している。

2.1. 快適な空間を目指して

中央図書館は、ラーニング・コモンズやインフォ



図1 マルチメディアルーム

[†] たくま さゆか 九州大学附属図書館資料整備室雑誌情報係 E-mail: t-38@lib.kyushu-u.ac.jp

[‡] ひょうどう けんし 九州大学附属図書館eリソースサービス室eリソースサポート係 E-mail: kenshi@lib.kyushu-u.ac.jp

[§] まきせ ゆかり 九州大学附属図書館eリソースサービス室eリソースサポート係 E-mail: ymakise@lib.kyushu-u.ac.jp

^{**} みなみ としろう 九州大学附属図書館研究開発室特別研究員、九州情報大学教授 E-mail: minami@lib.kyushu-u.ac.jp

^{††} いのうえ そうぞう 九州大学附属図書館研究開発室特別研究員、九州工業大学工学研究院准教授 E-mail: sozo@mns.kyutech.ac.jp

^{‡‡} きむ うんじゃ 九州大学附属図書館研究開発室研究員 E-mail: ejkim@lib.kyushu-u.ac.jp

メーション・コモンズと呼ばれる空間を特には整備していないが、頻繁に模様替えを行って利用者にとって快適な環境となるように努めている。例えば、学習スペースだけでなく、漫画など軽読書資料を置いたブックカフェというリラクゼーションスペースが設けられている。

また、最新映画の DVD が鑑賞できるマルチメディアルーム (図 1) は、新着 DVD が綺麗に展示してあって、学生にとっても人気があるスペースのようであった。他にも、スキャナーが自由に利用できる部屋や、予約制のコンピュータなど利用者にとって魅力的であろう設備を多数提供していた。

2.2. カウンター

中央図書館の建物は斜面を切り開いた位置に建てられており、メインフロアの玄関はスロープを少し上がった 4 階にある。まず、玄関を入ると、そこに 3 つ目のカウンターがあることに気付く。1 つ目のカウンターは入退館ゲートの横にあるカウンターで、入退館に関わる利用者対応を行っている。2 つ目のカウンターはフロアの中央にある総合案内カウンターであり、施設の利用案内や配架場所の案内を主に行っている。3 つ目のカウンターはフロアの脇の方にある図書の貸出返却カウンターである。

カウンターはこれら 3 つだけではない。各フロアに資料種別やサービス毎の部屋が設けられていて、それぞれの部屋にカウンターがある。そこでは各サービスの利用案内や資料出納の手続きなどが行われている。

これは、利用者の前面にきめ細かく職員を配置するという利用者サービス重視の表れではないかと思われる。

2.3. 閲覧室

ソウル大学校図書館では閲覧室をとっても重視しているようである。なんと図書館の 1 階から 3 階までは、書架や事務室のスペースが全くなく、すべて閲覧室で占められている。

九州大学附属図書館と比較すると、ソウル大学校図書館がいかに閲覧席を多く確保しているかが分かる。九州大学附属図書館の座席数は 2 千くらいであるが、ソウル大学校図書館はそのおよそ 3 倍の 6 千席近くの座席を用意している。一方、学生数は九州大学約 1 万 8 千名、ソウル大学校約 2 万 3 千名で、座席数ほどに倍率に差があるわけではない。

また、ソウル大学校中央図書館の 3 階閲覧室の一部は 24 時間開館になっていたり、閲覧室の入口に座席予約する端末が置いてあったり、ロッカーを月単位で借りられたりなど、日本の大学図書館ではあまり見たことがないシステムがある。おそらくソウル大学校では、

日本の大学よりも図書館の学習スペースという役割が重視されていて、学生による座席の奪い合いが激しいのだと推測される。

2.4. 携帯電話によるサービス

ソウル大学校図書館では携帯電話を使ったサービスが充実しているようなので紹介したい。まず、Mobile ID というサービスで、携帯電話を図書館利用者証として使うサービスである。具体的には、利用者 ID のバーコード画像を携帯電話にダウンロードしておいて、それを貸出手続きや入館の際にリーダーに読ませて使用する。

図 2 は入館ゲートに設置されているリーダーである。Mobile ID 用のリーダーは一番奥側の箱型の装置である。真中のリーダーは IC カード用のリーダーで、手前側が Mobile ID 以外のバーコードを読み取るためのリーダーである。我々の観察によると、かなり多くの学生が Mobile ID によって図書館に入館していた。この 3 種類の方法の中で、もっとも利便性が高く好まれているのであろう。



図 2 入館ゲートのリーダー

また、OPAC の検索結果を簡単に携帯電話に送ることができるサービスがあった。OPAC の検索結果に表示される携帯電話のアイコンをクリックすると、携帯電話番号の入力欄が表示される。利用者は、請求記号を鉛筆でメモする代わりに、携帯電話にその情報を送って、書架へとその図書を探しに行くことができる。

2.5. その他

その他に気付いた点をいくつか列挙しておく。

- 自動貸出機 (図 3) は多言語対応。インストラクションの映像も多言語。韓国語・英語・日本語・中国語のものがある。外国対応に力を入れているようで、他にも外国人専用のサービスカウンターがある。
- 書庫に見つからない本の検索をホームページ上からリクエストできるサービスがある。書庫

が広く、利用者にとって図書を探すことが難しいことが多々あるようなので、このサービスは有効であろう。

- 寄贈や寄付の文化が根付いているようである。例えば、企業からの寄付による PC ルームや広告付きの検索端末がある。玄関には図書の寄贈者のネームプレートが飾ってある。

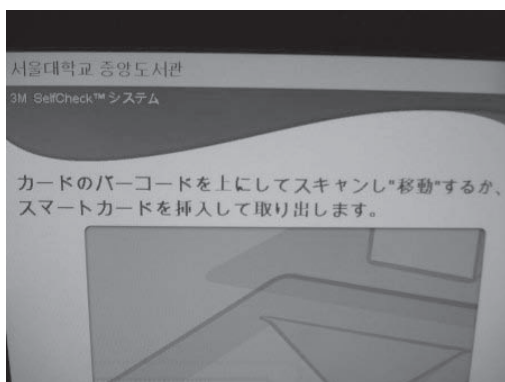


図3 自動貸出機

3. 成均館大学校図書館

3.1. 概要

成均館大学校は、創立 600 年という伝統のある大学である。伝統的な学問である儒学学科を持つ。儒学学科は、儒学に関する文書館も持つ。図書館[7]はソウルキャンパスに中央学術情報館が、水原（スウォン）キャンパスにサムソン学術情報館（Samsung Library）が、それぞれ設置されている。

今回は水原キャンパスにある理系図書館（Science Library）を訪問した。2009 年 3 月 1 日オープン予定の最新の建物である。大学に出資している SAMSUNG の名を冠しているだけあって、内容も最新の設備と環境であった。このキャンパスには理学、情報科学、工学、薬学、医学といった理系の学部があり、奨学金や卒業後の就職において SAMSUNG 社が多大な支援をしているという。

3.2. 設計



図4 全景

キャンパスに入って、建物（図4）に近づいていくと、ほとんどの壁が、ガラス張りであることに驚く。読書や、端末の画面の映り込みを考えると直射日光が入るのはよくないと思われるが、さながら空港ターミナルのような開放的な雰囲気であることは確かである。（内側には日よけのスクリーンが多く設置してあってこれを開閉するようになっていた。）

建物は7階建てであり、SAMSUNG が 60 億円を出資して建てたという。



図5 エントランス（入館ゲートと総合案内カウンター）

建物に入ると、成均館の頭文字 S をかたどった入館ゲート（図5手前と奥）がある。これは非接触 IC カードやバーコードに対応しており、後者はソウル大学校図書館と同様に、バーコードを携帯電話に表示させて入館する使い方が主である。その横には、総合案内カウンター（図5中央）がある。建物自体はいくつかの方角から入館できるようになっており、そのどれにも入館ゲートと案内カウンターがあった。



図6 吹き抜けのホール

入館ゲートをくぐると、建物の中央を7階までつらぬく吹き抜けに圧倒される。図6のように、(黄色い壁の)小部屋が各階からぼこぼこ突き出している。館内の基本色は白やグレイのモノトーンだが、黄色や赤をアクセントに使用してある。鮮やかな色のほうが創造的な活動を促すとのことである。

このように吹き抜けになってはいるが、遮音にも気が配られていて、例えば6階はガラスや壁で防音されていて、他の階に迷惑をかけずに6階で演奏会を開くこともできるそうである。

3.3. 学習環境



図7 ミーティングルーム

上述の吹き抜けに突き出た小部屋(図7)に行ってみると、そこはミーティングルームとして使われており、オープン前からすでに活発に使われている様子だった。部屋には可動式の椅子や机があり、プロジェクタも備え付けられていた。黄色い壁ではあるが、ガラ

ス面も含め、全面がホワイトボードマーカーで書き込むことができる。



図8 カフェ

このように開放的で斬新な部屋に驚かされるが、フロアを変わるとまた別の趣向があり新たな驚きがあるという調子である。図8はカフェに面した飲食が可能な6階のスペースである。



図9 端末室(上:講義用,中:ノートパソコン用,下:個人作業用)

端末室も用途に応じていくつも用意されている。写真（図9）のように講義向け，個人作業用，ノートパソコン向けと様々な形態があり，また一つ一つの部屋の規模もかなり大きい。閲覧席も，端末利用もすべて予約制となっている。



図10 AVブース

他にも，様々な設備が用意されている。図10のように二人掛けで見ることができるAVブースや，mp3などの音楽試聴機，LL(Language Laboratory)機器も多数用意されている。さらには，図11のようなマルチメディア編集システムや収録スタジオ（図12），さらに視聴覚ホール，ミニシアター，そして会議室（図13）などである（もっともガラス張りの会議室は集中力が落ちると思われるが）。



図11 マルチメディア編集システム



図12 収録スタジオ



図13 ガラス張りの会議室

3.4. 書庫

次に伝統的な図書館の本業ともいえる書庫についてであるが，これにも思い切った方針が採用されている。開架は5階部分に2万冊のみであり，その他の蔵書はすべて地下の閉架書庫においてある。資料費の約7割が電子ジャーナルや電子ブックに使われているそうである。また自動貸出返却機や検索用端末も多数置いてある。

一方で閉架書庫においては，入口に出納受付カウンターがあり，デュアルモニターでスタッフと利用者両方が向かい合って見ることのできる端末が置いてあり，同じ画面を見ながら相談できる。部屋の端にある検索端末から出納指示をすると，カウンター横のプリンタからその情報が出力される。それを元に職員が出納する。

これらの仕組みにより，書庫の管理を徹底的に効率化していることがうかがえる。

3.5. 運営について

これまでに述べたように，本図書館では，設備には多大な投資をしているが，運用は極力効率化を目指していることが分かる。施設や設備に関するSAMSUNGからの予算は充実しているが，人に関しては増員してもらえないという。企業活動においては変動費よりも，固定費を削減することが経営上重要となるが，この考え方が図書館にも導入されているものといえよう。

しかしそれでいて利用者サービスが低下するかといえば，そうではない。その反証は次のようにたくさん見つけることができた。

- 主題別司書を5名，工・情報・自然科学・医・薬学にそれぞれ割り当てている。主題別司書はもともとその分野を専攻していたというわけではなく，司書としての数年の経験ののち，各主題の担当となる。それだけの勉強をやれているということである。

- 入退館、貸出返却、アクセスログなどのデータを分析し、来館の少ない学部には PR に出向いたりするそうである。
- 他にも種々のデータ分析により効率的な業務を行うよう努力しているそうである。
- ホワイトボード・ソファ・テーブル一体型家具はスタッフがこだわって特注したデザインだそうである。椅子の下には鞆を置くことができる（図 1 4）。荷物の多い学生の様子をよく観察した結果であろう。



図 1 4 職員がデザインした椅子

3. 6. 雑感

本図書館はその設備の素晴らしさと真新しさに目を奪われてしまいがちではあるが、そればかりではなくその背後にある、利用者が満足できるサービスを追求する姿勢と運営および意思決定が体系づけられていることが、もっとも重要な点であり、本が少なくスタッフが少数の図書館でも、それを実現できることを体現する試みとして、今後目が離せない例となろう。仮に利用者満足度が非常に高くなれば、他のすべての図書館はそれ以上の対案を示せない限り追従せざるを得ない可能性が高い。

最後に、男子トイレを利用した際に壁全体に多くの男女の大きな姿絵が描かれていたのは、落ち着いて用を足すためにはせめてここだけは開放的でなくてよかろうと感じた次第である。

4. 国立中央図書館／国立デジタル図書館 (NLK/NDL)

国立中央図書館 (National Library of Korea, NLK) (図 1 5) [1,5] は、1945 年「国立図書館」として開館し、1963 年の図書館法制定で「国立中央図書館」に改称され現在に至っている。韓国の納本図書館であり、韓国を代表する図書館として国の知的文化遺産を体系的に収集・保存している。施設は、本館、司書研修館、資料保存館から成る。



図 1 5 国立中央図書館 (NLK)

NLK 本館に隣接して建設中の国立デジタル図書館 (National Digital Library, NDL, library) [2,4] は、2000 年頃からその必要性が提起されており、2005 年に策定された政策ビジョン「国立中央図書館 2010」のスローガンである「知力強国」実現のためのデジタル的基盤として同年 12 月に着工している。NDL は、国内外の情報サービスゲートウェイの役割を果たすポータルサイトの構築と、多様なデジタル資料を収集・整理・保存し、かつ、その情報を用いたサービスを研究・開発・提供するための物理的な施設として計画された。

今回の訪問では、NLK 本館の一部と、2009 年 5 月の開館に向け準備中の NDL の利用者スペースを見学した。

4. 1. インフォメーション・サービス

利用者は、入口正面の総合案内横のゲートで利用者カードを読み取らせて入館する。利用者カードは、あらかじめ NLK ホームページで申請しておけば、エントランスホールにある ID 登録室で発行してもらうことができる。

インフォメーションサービスフロアに入ると、ノートパソコンを持ち込んで利用するためのテーブルが並んでおり、多くの利用者でにぎわっていた。検索用端末もかなりの台数設置されている。



図 1 6 予約図書貸出機 (奥) と返却機 (手前)

奥には、書庫資料の出納・貸出を行うメインカウンターがある。フロアの入口付近には、予約図書貸出機

と返却機（図16）が設置されている。資料の館外貸出は行っていないが、これによって夜間（18:00－23:00）の無人貸出・返却にも対応している。

4.2. 経営情報システム（MIS）

利用者カードや自動貸出・返却機はRFIDシステムに基づいている。NLKは、2003年にRFIDシステムを導入し、2004年にはこれに基づく経営情報システム（Management Information System, MIS）を構築し始めた。このシステムによって目録情報、利用者カードの発行などが一元的に管理され、各種統計や利用情報をリアルタイムで把握できるようになった。現在も蔵書管理をはじめ、貸出・返却・閲覧などの利用者サービス全般にこのMISの拡大を図っており、リアルタイムな利用情報を即サービス改善へつなげていくことができるといえるのは興味深かった。

4.3. 開架閲覧室

NLKは7階建であるが、4階が開架閲覧室となっている。開架には、過去5年以内に出版された国内出版物と、過去4年以内に出版された海外出版物が配架されている。人文科学、社会科学、自然科学と分野ごとに部屋が分かれており、各部屋に入退室ゲートが設置されている。ゲート付近には、自動貸出機が設置されており、室外へ資料を持ち出す場合は、貸出手続きを行う。自動貸出機は、資料と利用者カードを重ねておくだけで処理できるタイプであった。（図17）



図17 自動貸出機

4.4. NDL（dibrary）

NDLの利用者スペースは、NLK本館前の広場の真下、地下1階から3階にかけて設けられている（図18）。なお、このような地下スペースと地上の建物を組み合わせた構造は、日本の国立国会図書館関西館を参考に設計されたとのことである。



図18 NLK（上）／NDL（右下）模型

地下1階はNLK本館と連絡通路でつながっている。通路の壁には、人の動きに反応して、NLKが象徴するアナログ空間からNDLが象徴するデジタル空間への移行を演出する映像が映し出されている（図19）。



図19 連絡通路の映像

通路を抜けると、地下3階から地下1階まで吹き抜けになっているため、最新の機器がずらりと並んだ様を見渡すことができる。地下とはいえ、高台になった公園の一角に建設されているため、ガラス張りの壁面からは自然光が差し込み、緑も目に入り、明るい印象である。



図20 Productivity Computer Cluster

地下3階には多言語対応のパソコンが複数置かれた

Global Lounge やデジタルアートの企画展示などが行われる予定というギャラリーも設置されている。

地下 2 階、まさにパソコンの群れといった様子の Productivity Computer Cluster では、デジタルコンテンツを閲覧したり、自ら製作したりすることができる(図 2 0)。ノートパソコンの持ち込み対応の設備も Laptop Zone として整備されている。

さらに奥に進むと、メディア・スタジオなども備えており、韓国的一般の人々の間で流行しているという UCC (User Creative Contents) に対応するプロ水準の映像やマルチメディア制作が可能な機材が揃えられている。また、障害者や高齢者など、デジタル情報へのアクセスが容易でない人のためのサポートも充実している。

この一館まるごとインフォメーション・コモンズともいえる空間構成には圧倒された。国立デジタル図書館という名称から想像される、ネットワークを通じたデジタル資料の配信という機能に加えて、デジタルメディアというものを来館者が肌で感じ取ることができる体験的教育施設としての側面も強く意識した図書館というコンセプトを打ち出しているものであろう。

5. 議政府市図書館



図 2 1 議政府科学図書館

議政府市[8]はソウル特別市北郊に位置する人口約 42 万人(2007 年)の市である。ソウルへの入口として、

また京畿道北部における輸送、工業、経済、教育の要所として発展を続けている。

図書館組織[9]は科学図書館(図 2 1)、情報図書館、子供図書館の 3 ヶ所の公共図書館と、住民自治センター内にある 14 ヶ所の小さい図書館から成る。2008 年に市内 17 ヶ所全ての図書館統合 RFID システムの構築が完了したことにより、1 枚の利用者カードで全ての図書館が利用可能となり、資料の取り寄せ等のサービスも行われている。

5. 1. 図書館の位置づけ

今回訪問した科学図書館と子供図書館の 2 ヶ所はいずれも 2007 年開館の新しい図書館である。どちらの館も市民講座のための設備が充実しているほか、科学図書館には宇宙に関する体験学習施設(図 2 2)や展望台(図 2 3)が併設され、学芸員も配置されているなど総合学習施設として位置づけられている様子が見られる。

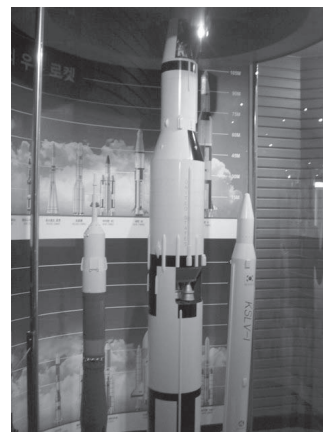


図 2 2 宇宙に関する展示

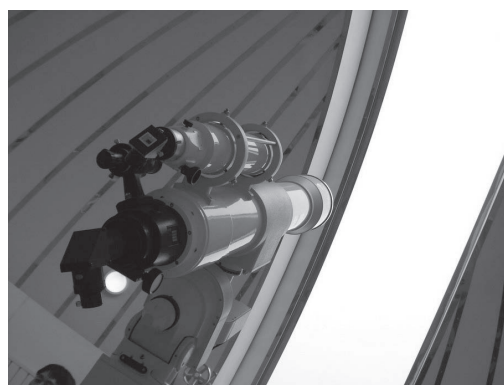


図 2 3 展望台

5. 2. 24 時間コーナー

3 ヶ所の公共図書館には 24 時間コーナーが設置されている。このコーナーは図書館入口の二重ドアの間に

設置された予約貸出機と無人返却機から成り、利用者カードで外側のドアを開錠して利用する。

予約図書貸出機（図24）に利用者カードを読み取らせると、画面に予約した資料の詳細が表示される。そこでパスワードを入力すると、該当資料の格納されたボックスが開く仕組みになっている。我々が訪問した際にはほぼ全てのボックスが使用中で、非常に利用率の高いサービスであることが感じられた。



図24 予約図書貸出機

自宅からオンラインで予約ができ、24時間受取可能なため利用者にとっての利便性は高いが、職員が資料を书架から出納して各ボックスへ格納する必要があるため、業務の効率化という面では改善の余地がありそうである。

無人返却機（図25）は一見すると日本の図書館にもある返却ボックスに似ているが、画面に資料を読み取らせて返却処理を終えた上で資料をボックスへ投函するため、翌朝職員が返却処理を行う手間が省かれる。投函後に予約の有無や所蔵館、配架場所による細かな分類が可能となればより効率化が図れるであろう。



図25 無人返却機（右）と返却ポスト（左）

5.3. 利用者カード

利用者カードの作成にあたって、図書館ホームページから申し込みまたは利用申請書をカウンターへ提出する点や、学生証等の身分証が必要な点は日本の図書館と同様だが、クレジットカードや交通カードを利用者カードとして使用できる点が異なっている。交通カードについてはJR 東日本の「SUICA(スイカ)」のようなものであると考えていただくと良い。

九州大学においても平成21年度から全学共通ICカードによる共通ID化が進められており、既存システムや外部システムとの連携についてなど学ぶところが多かった。

6. おわりに

今回訪問した図書館はいずれも韓国国内でもよく知られた、先進的な図書館であろうと考えられる。しかも、大学図書館と公共図書館の双方を見学でき、館種による違いと同時に普遍性も感じることができた。

訪問を振り返り、特に感じた点は次のようなことである。

（1）学習空間の重要性

ソウル大の報告にもあるように、韓国の図書館にとって利用者への学習環境の提供は非常に重要な役割であると認識されている印象を受けた。大学図書館はもとより公共図書館もそうである。そのため、閲覧室の充実には特に力を入れているようである。

これは、学生が学習場所として図書館を利用する割合が高いという以外に、成人の利用者も、図書館で調査・研究するという姿勢が根付いているためではないかと考えられる。社会的に生涯学習の重要性が叫ばれている現在、日本の図書館にとっても重要なテーマである。インフォメーション・コモンズに留まらず、多角的な学習支援を行う必要性がある。

また、韓国の図書館では、「座席の奪い合い」が激しいためか、座席予約システムの利用が一般化している。多くの図書館が一人あたりの座席利用制限時間を設けており、それを超えると新たに予約しなければならないなどの仕組みで、座席利用の公平化を図っているようである。

（2）寄贈／寄付文化

韓国の企業は、様々な形で図書館などの公共サービスに寄贈／寄付する慣習があるように見受けられる。図書の寄贈のみならず、視聴覚室に設置されたパソコンや機器などが一式ある電気機器企業からの提供であったり、図書館の入館カードとしても利用可能なICタグ学生カードが銀行からの提供であったりする。

銀行としては、学生カードにその銀行の口座取引機

能を付けることで将来に渡って取引してもらおうという思惑があり、このような提供を行っているもののようである。いずれにしても、先行投資や企業の社会貢献活動の一環として、このような文化が根付いているのは、ある意味うらやましさを覚える。

米国でも、成功した起業家が、貧しかった時代に図書館を利用することにより、無料で情報収集などが行え、そのおかげで今の成功があったという理由で、図書館に寄付するというような話を聞く。日本でもこのような文化が育つことが、今後の社会発展にとって極めて有意義なことではないかと思われる。

(3) IC タグの利点を生かしたセルフサービス

国立中央図書館や議政府市図書館にも見られるように、IC タグを導入した図書館では、自動貸出機（セルフ・チェックアウト・システム）が設置されていることが多い。自動貸出機は、貸出手続きを利用者自ら行うため、図書館員にとっては業務負担の軽減につながる一方、利用者にとっても、たとえ図書館職員であっても目の前でどういう図書を借りるか見てほしくないというプライバシー意識の面で好ましいシステムである。その結果、導入館においては少なくとも半数程度は自動貸出機によって貸出処理されているようである。

自動貸出機を自動返却機としても利用することは、導入設備の有効利用の観点からは望ましいものであるものの、自動返却機で返却された予約本を機械の傍らに置いたブックトラックなどに戻す方式では、予約本に対する手続きを職員が直ちに行うことができないなどの理由により、利用を躊躇する場合が多い。

韓国の図書館では、図 1 6 や図 2 5 に見られるような 2 分類機能のついた自動返却機がよく利用されている。どのように 2 分類するかは図書館により異なる。ある図書館では、一方は予約されていない図書、もう一方は予約図書と設定し、予約本処理の効率化を図っている。このような機械を設置することで、返却された予約本が行方不明になるリスクを軽減することが可能となる。これは IC タグシステムの有効な利用法の一例である。

図 1 6 や図 2 4 にあるような予約図書の貸出機も最近注目されている IC タグ利用の用途である。これも自動化技術を活用することで予約図書の処理を利用者に任せ、職員の労力を軽減するとともに、利用者への利便性向上のための 24 時間サービスを同時に実現する仕組みとして優れた方式である。

韓国図書館の訪問を振り返ってみると、今後の図書館の方向性として、ますます多様化する利用者ニーズを踏まえ、従来以上に利用者の視点に立ったサービスを実現することの重要性を改めて実感した。今回訪問したいずれの図書館でも、新しい技術を積極的に導入

し、効率化できる点は徹底的に効率化を図りつつ、それ以上に、高度なサービスの実現を目指すという姿勢を感じた。

最後に、これらの図書館が我々の訪問を快く受け入れてくれたこと、そして、我々の案内のために尽力された多くの方々に深く感謝の意を表するとともに、これらの図書館が、今後とも発展を続け、我々に示唆を与え続けてくれることに期待したい。

参考文献

- [1] 曹在順. 韓国国立中央図書館の現状：図書館情報化推進策と公共図書館振興策を中心に(<特集>韓国のいま). 情報の科学と技術 Vol. 57, No. 1, pp.9-14, 2007.
- [2] 武田和也. 全世界のデジタル図書館の統合ポータルを目指して～韓国国立デジタル図書館の概要～. カレントアウェアネス, Vol. 294, No. CA1641, 2007. <http://current.ndl.go.jp/ca1641>
- [3] 兵藤健志. 海外研修報告:ソウル大学校図書館. 九州大学附属図書館研究開発室年報 2008/2009, pp.40-45, 2009.
- [4] dibrary. <http://www.dibrary.net/>
- [5] 韓国国立中央図書館 (The National Library of Korea) . <http://www.nl.go.kr/>
- [6] ソウル大学校中央図書館. <http://library.snu.ac.kr/>
- [7] 成均館大学校図書館 (学術情報館) . <http://lib.skku.edu/>
- [8] Uijeongbu City (議政府市) . <http://japan.ui4u.net/>
- [9] 의정부과학·정보도서관 (議政府科学・情報図書館) . <http://www.uilib.net/>
(アクセス確認日付 2009-06-12)